研究報告

農村地域で子育て中の母親が感じる母親自身の幼少期と現在における地域のつながり
ーソーシャルキャピタルの検討ー

金子紀子[1§]，石垣和子[1]，阿川啓子[2]

概　要

本研究の目的は，農村地域で子育て中の母親が感じる母親自身の幼少期と現在における地域のつながりを明らかにすることである．農村地域で乳幼児を子育て中の母親８名に実施したグループインタビューの内容を質的に分析した．母親自身の幼少期における地域のつながりは，【祖母や母に連れられ大人に混じった】，【子どもだけで自由に遊びまわる世界があった】，【大人は子どもを温かく見守っていた】，【顔見知りの関係で安心感があった】であった．現在の地域のつながりは，【近所付き合いの程度には差がある】，【小学校区内での人付き合いは分からない】，【近所にはない子ども同士のふれあい方がある】，【地縁組織の一員になる】，【不審者等犯罪から子どもを守る】であった．幼少期は総体として肯定的に捉えられ，現在においては希薄化している現状と，農村地域におけるソーシャルキャピタルの正と負の両面を捉えていたと示唆された．

キーワード　子育て，農村地域，母親の幼少期，地域のつながり，ソーシャルキャピタル

１．はじめに

少子化や核家族化の進行など子育てを取り巻く環境は変化しており，「健やか親子 21」や「子ども・子育てビジョン」等の施策によって，これまで子育て支援センター等の物的資源や，子育てサポーターのような人的資源が整えられてきた．かつて母親の身近にいた子育て経験者からの伝承の機会が少なくなり，また多様化している個々のライフスタイルに対し，近年はさらにきめ細かい子育て支援のため，その地域社会の人々の連帯意識や価値観の共有など，人々や地域のつながりは重要である．

しかしながら，地域のつながりが希薄化していると言われて久しい．国民生活白書によれば，２つの調査結果から，1975 年から 2007 年までは全体としては近隣関係が希薄化し続けてきたとしており[1)]，さらに別の調査においてもその後から現在まで希薄化の傾向が徐々に進行している[2)]．したがって，現在子育て中の母親は希薄化し続け，変化する社会環境の中で生まれ育ち，現在子育て期を迎えているといえる．

[1] 石川県立看護大学　[§] 責任著者
[2] 島根県立大学

母親の被養育環境と子育てに関しては，虐待や愛着の世代間連鎖[3-5)]をはじめ，母親が自分の成育歴を肯定的に感じている場合に育児不安感スコアが低いこと[6)]，祖母中心のケアとモデル的な養育を受けてきた母親は充実感欠如が低い傾向があり[7)]，生育家族へのイメージが良好であると育児ストレインが低いこと[8)]，愛情ある温かな養育を受けた母親は，子どもとの関係を否定的にとらえることが少ない傾向にある[9)]等，母親自身が育った家庭内環境は母親の子育てに影響を及ぼしていることが明らかになっている．しかしながら，母親が家庭外である近隣等地域で人々とどのような関係の中で育ち，その経験が母親の子育てに影響しているかについては明らかになっていない．地域のつながりが希薄化し続け，子育ての孤立化と言われる現在の社会においては，これらのことが母親の子育てに何らかの影響を与えている可能性がある．また，国内を地域ブロックごとに分析した調査では，都市と地方では子育ての相談相手や世話人の属性，親からの支援等の子育て環境に違いがあることが明らかになっている[10)]．結婚により新たな土地で生活することの多い女性にとっては，被養育環境から受けた経験と現在子育てを

行なっている居住地において，都市と地方との差ほど大きくなくとも子育て環境に隔たりがあれば，それが子育てを困難にする要因となることも考えられる．

近年，地域のつながりを指すソーシャルキャピタル（以後，SC とする）の概念が注目され，健やか親子 21（第２次）[11] や地域保健対策の推進に関する基本的な指針 [12] などにおいてもその重要性が言われている．パットナムによると，SC は「社会の効率性を改善できる，信頼･規範･ネットワークといった社会組織の特徴」[13] であり，この 10 年余りで SC が豊かであることが健康にとって好ましいことを示唆する研究が蓄積されてきた [14]．しかしながら，子育てと SC との関係の研究は進んでいるとは言い難く，子育てを SC の概念で検討することは，孤立化等子育てにおける諸問題の解決のための一助になると考える．

以上のことから本研究の目的は，農村地域で子育て中の母親が感じる母親自身の幼少期と現在における地域のつながりを明らかにすることである．そして SC の概念で整理し，SC の地域特性を考慮した子育て支援の基礎資料を得ることとする．対象地域を農村地域としたのは，農村地域は都市的地域と比較し，近年顕著な人口減少や高齢化といった特徴を持つ一方，地縁組織などの地域のつながりが比較的残っていると考えられ，これらを明らかにすることは地域特性と子育て支援を検討していく上で価値があると考えるからである．

２．方法

２．１　対象

研究対象は農村地域で３歳児以下の乳幼児を子育て中の母親とし，A 市，B 町の２市町において次の手順で参加者を選定した．A 市子育て支援担当者および B 町保健師に研究目的，方法等を説明し，調査可能な子育て支援センターを推薦していただいた．B 町は保健師の推薦後，B 町子育て支援担当者に調査の承諾を得た．推薦先は２市町とも，保育園内の子育て支援施設（広場，子育て支援センター）１箇所であり，研究者が各施設代表者に文書と口頭にて協力依頼を行ない，定例の開放日に集った母親を研究参加の候補者とした．そして，開放日に来所している研究参加の候補者に研究者が書面と口頭で説明し，同意の得られた母親を参加者とした．A 市と B 町は隣接した市町で同一保健所管内にあり，山や海で囲まれた平野部には田畑が広がった農村地帯である．２市町とも人口は約２万人，近年人口減少と高齢化が進んでおり，高齢化率は 30％を超えている．また出生率は B 町が A 市より若干高いもの，平成 25 年の B 町を除き，毎年県平均を下回っている．

２．２　データ収集方法

インタビューガイドを用いてグループインタビューを実施した．グループインタビュー法を用いたのは，母親の現在の子育ての背景にある潜在的な情報を把握でき，相互作用による意見の引き出しができ，参加者のプレッシャーが少ないなどの効果があるためである [15]．インタビューの内容は，母親自身の幼少期と現在の子育て環境について，家庭内および近所付き合いを中心とした小学校区までの地域の人々の支え合いなどである．なお近所の範囲は，参加者が直感的に近所と感じる範囲とし，語ってもらった．

参加者には番号が書かれたネームプレートを首から提げてもらい，相互に番号で呼び合った．また参加者がインタビューに集中しやすいよう，インタビュースペースと子どもスペースに分け，子どもスペースには保育者２名を配置した．スペースの区切りは設けず，互いが様子を確認でき，必要時行き来できるようにした．参加者の同意を得て，インタビュー内容は IC レコーダーに録音した．参加者の基本属性については自記式質問紙にて把握した．調査期間は 2013 年９月～ 10 月であった．

２．３　分析方法

インタビュー内容を逐語録に起こし，データとした．データを精読し，意味内容を損なわないよう整理した後，幼少期の環境と現在の環境における「地域のつながりの程度と内容，それに対する母親の思い」と読み取れるデータを取り出し，類似したまとまりに整理した．次に，類似したまとまりを統合し，サブカテゴリとした．さらにサブカテゴリの類似性により分類し，カテゴリとした．グループインタビューは１回あたり２～４名が参加，計３回実施し，計 10 名が参加したが，転勤族を除き今後も現在の地域に定住予定としている８名のデータを分析対象とした．分析にあたっては，質的研究の実績があり精通した共同研究者と検討を重ねた．

２．４　倫理的配慮

参加者には，研究の趣旨と方法，参加の自由意志，途中辞退できること，得られたデータの匿名化，研究目的以外には使用しないことなどを文書と口頭にて説明し，同意書の署名にて研究協力の同意を得た．

本研究は，石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した．（看大第 420 号）

３．結果

３．１　参加者の概要

参加者８名の平均年齢は 35.6 歳で，専業主婦が６名，育休中が２名で，子の数は１人が６名，２人が２名であった．現在の家族形態は，拡大家族が５名であり，うち１名は実家にて同居，４名は夫の実家にて同居していた．核家族は３名であり，うち２名は実家，夫の実家とも近く，１名は夫の実家の近くに住んでいた．出身地は同市町内が４名，近隣市町が３名，隣県が１名であり，出身地域は農村部が７名，都市部が１名と，ほとんどが農村部の出身であった．（表１）

以下，抽出されたカテゴリを【　】，サブカテゴリを〈　〉，参加者の語りを「　」，研究者の補足部分を（　）とし，カテゴリごとに内容を説明する．なお，一部のカテゴリについては，語りの「　」後に発言した参加者を（　）で示した．

３．２　母親自身の幼少期における地域とのつながり

母親自身の幼少期のおける地域とのつながりは，【祖母や母に連れられ大人に混じった】【子どもだけで自由に遊びまわる世界があった】【大人は子どもを温かく見守っていた】【顔見知りの関係で安心感があった】の４のカテゴリと 10 のサブカテゴリが抽出された（表２）．

【祖母や母に連れられ大人に混じった】

「うちはおばあちゃんがいたので，近所のおばあちゃん家に一緒に遊びに行ったりして話した」り，「おじいちゃんおばあちゃんがいて面倒をみてもらっている感じだったので，おばあちゃんの知り合いのところに連れて行ってもらったり，そういう近所付き合いはあった」というように，〈祖母に連れられて行動を共にした〉り，〈親や祖母と畑に行くと皆が集まっていた〉経験をしていた．祖父母と同居していた母親が多く，特に祖母を通じた地域の大人とのつながりが存在していた．

【子どもだけで自由に遊びまわる世界があった】

「年上のかなり年の離れた近所のお兄ちゃんとかお姉ちゃんが親代わりに面倒をみてくれた」り，「住宅街というわけではなかったですが，結構町内の年上年下に関わらず遊びにいったりした」など，〈子ども同士の上下関係の中で遊んだ〉り，「向かいの，全然知らない近所のおばあちゃん家に子どもだけで遊びに行くことは普通にしていました」というように，〈子どもだけで近所の高齢者宅に遊びにいった〉経験をしていた．子ども社会が近所や町内の範囲で形成されていた．

【大人は子どもを温かく見守っていた】

「近所の人が飼っている犬を触らせてもらったり，近所の人が話しかけてくれるなどかわいがってくれた」など，〈近所の人が温かく接してくれ

表１　研究参加者の概要　n=8

	年齢	職業	子の数	家族形態(同居家族)	出身地	出身地域	備考
A	30歳代	専業主婦	2人	拡大家族(本人側)	同市町	農村部	
B	30歳代	会社員(育休中)	1人	拡大家族(夫側)	同市町	農村部	
C	不明	専業主婦	2人	核家族	隣県	農村部	夫実家近く
D	30歳代	専業主婦	1人	拡大家族(夫側)	近隣市町	農村部	
E	20歳代	会社員(育休中)	1人	核家族	同市町	農村部	実家，夫実家とも近く
F	30歳代	専業主婦	1人	拡大家族(夫側)	近隣市町	都市部	
G	40歳代	専業主婦	1人	拡大家族(夫側)	近隣市町	農村部	
H	30歳代	専業主婦	1人	核家族	同市町	農村部	実家，夫実家とも近く

＊グループインタビュー参加者　１回目：A,B　２回目：C～E　３回目：F～H

表２　母親自身の幼少期における地域のつながり

カテゴリ	サブカテゴリ	語り例
祖母や母に連れられ大人に混じった	祖母に連れられて行動を共にした	うちはおばあちゃんがいたので，近所のおばあちゃん家に一緒に遊びに行ったりして話した
	親や祖母と畑に行くと皆が集まっていた	畑に親やおばあちゃんに連れられていくと，皆そこら辺の畑に集まっていた
子どもだけで自由に遊びまわる世界があった	子ども同士の上下関係の中で遊んだ	年上のかなり年の離れた近所のお兄ちゃんとかお姉ちゃんが親代わりに面倒をみてくれた
	子どもだけで近所の高齢者宅に遊びにいった	向かいの，全然知らない近所のおばあちゃん家に子どもだけで遊びに行くことは普通にしていました
大人は子どもを温かく見守っていた	近所の人が温かく接してくれた	近所の人が飼っている犬を触らせてもらったり，近所の人が話しかけてくれるなどかわいがってくれた
	よその敷地内に入ってもトラブルはなかった	隣近所とか同じ町内の敷地内に入ったりしていても，苦情もなく何か笑って過ごせた環境
	子どもの危険な遊びを大人は見守っていた	包丁を振り回したり，鍬とかカマとか持たせてくれたり，（中略），おばあちゃんたち自身も畑とかしているからある程度危ないことは平気でさせてくれた
顔見知りの関係で安心感があった	周囲に顔と名前が知られていた	祖父母と同居で自営だったので，顔と名前は分かってもらっていた
	何をしていてもすぐ親に知られた	どこかの人が親に言って，親から怒られたりとか，もうあそこの家の子だって分かるので，何をしていてもすぐに親は知っている
	危険人物という認識が全くなかった	おじいちゃん，おばあちゃんに連れられてどこかに行った時に出会ったおじさんは，自分の家族とよく話すおじさんだから，この人は大丈夫な人だという風に，危険人物という認識が全くなかった

た〉．また，隣近所や同じ町内でのおにごっこやかくれんぼ等で近所の塀に隠れるなど，〈よその敷地内に入ってもトラブルはなかった〉．さらに，「多分もっと危ないことなどしていたと思います．包丁を振り回したり，鍬とかカマとか持たせてくれたり，（中略），おばあちゃんたち自身も畑とかしているからある程度危ないことは平気でさせてくれた」など，〈子どもの危険な遊びを大人は見守っていた〉．

【顔見知りの関係で安心感があった】

祖父母と同居で自営業を営む家に育ち，〈周囲に顔と名前が知られていた〉り，「どこかの人が親に言って，親から怒られたりとか，もうあそこの家の子だって分かるので，何をしていてもすぐに親は知っている」というように，〈何をしていてもすぐ親に知られた〉状況であった．また，「おじいちゃん，おばあちゃんに連れられてどこかに行った時に出会ったおじさんは，自分の家族とよく話すおじさんだから，この人は大丈夫な人だという風に，危険人物という認識が全くなかった」というように，周囲の人に対しては〈危険人物という認識が全くなかった〉．

３．３　現在の子育てを通じた地域とのつながり

現在の子育てを通じた地域とのつながりは，【近所付き合いの程度には差がある】【小学校区内での人付き合いは分からない】【近所にはない子ども同士のふれあい方がある】【地縁組織の一員になる】【不審者や犯罪から子どもを守る】の５のカテゴリと 17 のサブカテゴリが抽出された（表３）．

【近所付き合いの程度には差がある】

「隣が会社や畑で家がポツンと建っていてあまり人と会わない」（F さん），近所に人がほとんどおらず，人と会うことがないなど，〈近所にほとんど人がいない〉状況であった．また，「（近所と

表３　現在の子育てにおける地域のつながり

カテゴリ	サブカテゴリ	語り例
近所付き合いの程度には差がある	近所にほとんど人がいない	隣が会社や畑で家がポツンと建っていてあまり人と会わない
	近所とは挨拶か立ち話程度なら言葉を交わす	（近所とは）やっぱり挨拶程度で，お隣さんは構ってくれたりとかそんなに長時間ではないですけど，挨拶したついでに立ち話したり
	近所から子育ては支えられていない	近所とは挨拶はするけれど，サポートはない
	同じ市内でももう少し田舎の実家は近所付き合いが密	出身と同じ市内に住んでいるけれど，私の出身地はもうちょっと田舎の方なので，近所付き合いも密にあったかもしれない
	散歩では高齢者の温かい声かけがある	もともと散歩していたら色々と声かけてくださる
	旧知の近所とは互いにおすそ分けしあう	おすそわけがあって，すみませんって言っていつももらったりとか，返したりとか
	私にしてくれたように子どもを可愛がってくれる	私が小さい時もかわいがってくれたし，この子やお兄ちゃんもかわいがってくれたり，今も関係がつながってて
	夫の実家を通じた関係でよく声かけがある	（同じ）アパートの人とは，全くちょっと挨拶もしないくらい会わないけれど，主人の実家の近所の人，お向かいさんでしたら，よく声をかけてくれるので，顔見知りになっている
	嫁としての立場では近所には入り込めない	自分の育った実家の近所っていうのとやっぱり嫁に来たっていうので，もう入り込めないってところがある
小学校区内での人付き合いは分からない	小学校区での人付き合いのイメージはない	主人自体も小学校が遠くて親が送迎していたらしいので，そういう意味ではあんまり校区とか言われても…
近所にはない子ども同士のふれあい方がある	ママさんに誘われて子育て行事に参加する	（子どもと）同じ年齢の方がいるので色々こういう子育て支援の時に誘ってもらったり
	公的施設に行き子ども同士ふれあう	ご近所だと，子ども同士のふれあいが少ないし，こういうところ（子育て支援センター）に来ないとなかなかふれ合えない
	近くに遊び場がなく，車で出かけてふれあう	公園に行くと行っても，車に乗っていかないといけないし，近所ってわけにはいかない
	学童保育やスポーツ系での子どもなりの世界を望む	近所は下手すれば高齢化の一途を辿っているので，（中略），学童とか，サッカーなり，野球なり男なのでスポーツ系（スポーツ少年団）でいいですから，近所っていうよりは子どもは子どもなりの世界を持って欲しい
地縁組織の一員になる	地区のイベントや行事のチラシが届いて参加する	イベントごとがあれば参加してくださいってチラシがきて，では参加しますって感じです
	葬祭時は昔ながらのしきたりに従い協力する	（町内の）おばあちゃんが亡くなった時に，会館で家の夫もお通夜やお葬式にお手伝いに行った
不審者や犯罪から子どもを守る	不審者や犯罪が心配のため遊びに出すのは怖い	すごく怖いです，（犯罪の）ニュースを見るたびにうちの子にもこんなことがおきるのではないかと旦那と今から心配しています

は）やっぱり挨拶程度で，お隣さんは構ってくれたりとかそんなに長時間ではないですけど，挨拶したついでに立ち話したり」（H さん），「祭りだともちろん話したりするけど，助け合いとかはなくて，世間一般の立ち話とかその程度」（D さん）と〈近所とは挨拶か立ち話程度なら言葉を交わす〉ものの，「近所とは挨拶はするけれど，サポートはない」（G さん）や「支えられているとかそういうところまでいかない」（E さん）というように，〈近所から子育ては支えられていない〉状況であった．

しかしながら，同市内出身の母親は，〈同じ市内でももう少し田舎の実家は近所付き合いが密〉と，市内にも近所付き合いの温度差があると感じていた．

「周りはおじいちゃんおばあちゃんは多いと思うので，（中略）旦那と一緒に，周り散歩していたらどこの人だねって声かけられて，どこどこですって言ったら，あそこの姉さんなのねって言われて，あったかい」（B さん）や「もともと散歩していたら色々と声かけてくださる」（E さん）というように，〈散歩では高齢者の温かい声かけがある〉．また，A さんは自身も小さい頃から育った土地であり，きゅうりなど採れた野菜を〈旧知の近所とは互いにおすそ分けしあう〉ことや，〈私にしてくれたように子どもを可愛がってくれる〉というように，近所の人と幼少期からの関係性が継続していた．また，核家族の C さんは，「（同じ）アパートの人とは，全くちょっと挨拶もしないくらい会わないけれど，主人の実家の近所の人，お向かいさんでしたら，よく声をかけてくれるので，顔見知りになっている」と〈夫の実家を通じた関係でよく声かけがある〉状況であった．

一方で，「自分の育った実家の近所っていうのとやっぱり嫁に来たっていうので，もう入り込めないってところがある」（H さん）と語るように，〈嫁としての立場では近所には入り込めない〉と自ら積極的に溶け込めにくく，一歩引いた思いがあった．

参加者全員がこのカテゴリに関する発言をしていた．

【小学校区内での人付き合いは分からない】

「主人自体も小学校が遠くて親が送迎していたらしいので，そういう意味ではあんまり校区とか言われても…」と〈小学校区での人付き合いのイメージはない〉状況であり，他の母親からも同調が多かった．

【近所にはない子ども同士のふれあい方がある】

子育て関連の情報に詳しい子どもと同じ同級生の〈ママさんに誘われて子育て行事に参加する〉ことや，「ご近所だと，子ども同士のふれあいが少ないし，こういうところ（子育て支援センター）に来ないとなかなかふれ合えない」と〈公的施設に行き子ども同士ふれあう〉状況であった．また，地区内の分校やそこにあったブランコなども撤去され，「公園に行くと行っても，車に乗っていかないといけないし，近所ってわけにはいかない」と〈近くに遊び場がなく，車で出かけてふれあう〉状況であった．そして，「近所は下手すれば高齢化の一途を辿っているので，（中略），学童とか，サッカーなり，野球なり男なのでスポーツ系（スポーツ少年団）でいいですから，近所っていうよりは子どもは子どもなりの世界を持って欲しい」と語り，〈学童保育やスポーツ系での子どもなりの世界を望む〉母親の思いがあった．

【地縁組織の一員になる】

自宅に〈地区のイベントや行事のチラシが届いて参加する〉ことや，昔ながらの会館での〈葬祭時は昔ながらのしきたりに従い協力する〉ことを通じて，町会や自治会といった地縁組織の一員としてのつながりが存在していた．

【不審者や犯罪から子どもを守る】

「すごく怖いです，（犯罪の）ニュースを見るたびにうちの子にもこんなことがおきるのではないかと旦那と今から心配しています」や，「田舎だから安心していたけど，都会の話でなく，（不審者情報が）こういうところにもあるんだなって」と〈不審者や犯罪が心配のため遊びに出すのは怖い〉という思いを持っており，土地柄を問わず，子どもの安全に対して危機意識をもっていた．

４．考察

参加者は，ほとんどが同市町や近隣市町の農村部出身であり，また現在，夫の実家で同居している者が半数で，核家族の者も実家や夫の実家の近くで暮らしていた．これらは農村地域おける家族形態や親との居住距離の特徴を示していたと考える．なお，参加者のうち，１名は出身地域が都市部であった．これは自記式質問紙にて母親自身が都市部を選択しているためであるが，出身地は近

隣市町であり，先行調査[10]では同じ地域ブロックに属しており，その他の対象者と出身地域には大差がないことが考えられる．

４．１　母親自身の幼少期と現在の子育て環境における地域とのつながりの比較

母親自身の幼少期における地域とのつながりは，祖母や母に連れられ大人と関わりながらも，遊びでは子どもだけの世界を持ち，またそれを温かく見守る大人がいることを子どもとして感じつつ，安心感を持っていた．これらはいずれにおいても参加者らが肯定的に幼少期の体験を捉えていたと考える．

一方，現在，親の立場となって感じる地域とのつながりは，近所付き合いの程度に差が見られた．すなわち，１つ目は，近所に人がいなかったり，挨拶や立ち話程度なら言葉を交わす，近所から子育ては支えられていないという，近所付き合いの比較的薄い場合である．２つ目は，高齢者からの声かけを温かいと感じたり，互いに野菜などのおすそ分けをしたり，子どもを可愛がってもらったり，夫の実家を通じた関係でよく声かけがあるという，付き合いの関係性が濃く，地域の人とのふれあいを親しんでいるような場合である．前者においては，農村地域においても，地域のつながりの希薄化が進んでいる現状を示していると考える．後者においては，農村地域はSCが豊かであり，お互い様である互酬性の規範が確認できる．すなわち，農村地域のSCの正の面が捉えられている．里山のSCの研究では，地域の自然，あるいはその自然の恵みを介し発達する規範があり，これが集落内の人間関係を円滑にするよう機能している[16]とされており，同様のことが確認された．

核家族にも関わらず，夫の実家を通じた関係でよく声かけがあるＣさんは，夫や夫家族をよく知る近所からＣさんやその子どもが夫家族として同じように受け入れられ，円滑な関係性を形成していると言える．長年培われてきた良好な人間関係は，核家族化が進んでいる現在においても，例え世代を超えても，住居が近居に分散している程度であれば，これまでの関係性が継続していることを示していると考える．農村のSCに関する先行研究では，先祖代々受け継ぐ農村独特の人のつながりを大切にすることが明らかになっており[17]，本研究においても，農村地域のおけるSCの正の面が捉えられていると考える．しかしながら，同じ核家族のＨさんの場合は，嫁としての立場では近所には入り込めないという疎外感を感じていた．SCの分類として，同じ地域の人々との強力な紐帯である「結合型SC」と，異なる構造的な権力をもつ個人間のつながりである「橋渡し型SC」がある[18]．農村のSCの特徴は結合型SCと言われているが[19]，結合型SCは強いきずな，結束によって特徴づけられ，内部志向的であり，この結びつきが強すぎると排他性につながるという負の面も指摘されており[20]，新入りである嫁の立場として近所に入り込めないのは，まさにSCの負の面が強調されていると考える．またこのことは，農村や里山は定住性の高い社会であり[16,19]，里山のSCの特徴として，新参者の受け入れにくい状況が明らかとなっていることからも[16]，支持されると考える．

SCの構成要素の１つであるネットワークについて，本研究では，近所付き合いを中心とした地域の人々を対象に把握しており，つきあいや交流の相手は，隣近所が最も多く語られているが，このほか，現在の環境では，いわゆるママ友や，子育て支援の公的施設や町会や自治会といった地縁組織でのつきあいや学童保育，スポーツ系（スポーツ少年団）が語られた．

幼少期の地域のつながりには，顔見知りの関係で安心感があったというカテゴリが抽出された．これは，子どもながらに信頼できる大人達に囲まれていたことを感じ，周囲への信頼感が豊かであることを示していると考える．すなわち，子どもながらにSCを豊かに感じていた．一方，現在の地域のつながりには，不審者や犯罪から子どもを守るというカテゴリが抽出された．不審者情報や犯罪のテレビ報道で他人事でなく感じたり，身近なことと捉えているのは，立場が変わり親として子どもの安全を守る危機意識が高いと言えるのと同時に，一般的な他者への信頼感が豊かとはいえないことを示唆している．　このことが，時代の変遷によるものなのか，幼少期と現在の地域性が異なることによるものかは本研究の結果からは言及できないが，SCが豊かな地域コミュニティほど犯罪や暴力にさらされるリスクが小さく，安定しているなどSCと犯罪の関係は複数の研究で指摘されており[21]，農村地域で子育て中の母親においても，犯罪への危惧が生じており，SCの豊かさが減退している可能性が示唆された．

また，現在の地域のつながりとして，参加者らは，学童保育やスポーツ系での子どもなりの世界

を望んでいた．このことは，単に，近所に子どもが少なく物理的に子どもの世界を近所に求めることが不可能なだけでなく，幼少期の地域のつながりに，子どもだけで自由に遊びまわる世界があったというカテゴリが抽出されていることから，参加者らが幼少期に体験した子どもだけの世界を肯定的に捉えていることが潜在的に少ながらず影響していることが考えられる．

以上のことから，母親自身の幼少期と現在の子育て環境における地域とのつながりを比較すると，幼少期の体験は総体として肯定的に捉えられ，現在においては，希薄化している現状，および農村地域におけるSCの正と負の両面を捉えていたこと，また，幼少期に子どもだけの自由な世界があったと捉えていたことは，現在の子育てにおいても子ども同士のふれあいを求め，学童保育やスポーツ系での子どもなりの世界を望むというサブカテゴリに示されていたと考える．

４．２　子育て支援においてSCの地域特性と母親の個別性を捉える必要性

人は家族や社会などの環境との相互作用で日常生活を営んでいる．同じような地域での経験は共通の価値の体系を形成する一方（共通性），同じ環境下におかれても同じように経験するとは限らず，その人の性格・個性やその時々の立場によっても経験の内容が異なり，それぞれの経験をもとにした個別の価値の体系を身につけている（個別性），とされる[22]．本研究においても，幼少期に体験した地域のつながりを同じように肯定的に感じ，現在，同じ地域内に生活している者であっても，現在の地域のつながりの程度には差が見られ，希薄化している現状か，農村地域のSCの正か負のどちらかの面で捉えていたのは母親のこれまでの経験をもとにした価値の個別性によるものと考える．近年，個人のニーズは多様であり，例えば，近所付き合いであれば，それ自体を好まず，一切ないことを願う母親もいる．本研究の対象地域である農村地域のようにSCが豊かとされる地域において，そう願い行動することは，母親にとって様々な面で困難が生じるであろう．また，大都市で生まれ育った者が，過疎地域や離島等で子育てをする場合など，出身地域と現住所地との間でSCの温度差がある場合においては，SCの温度差を感じながらもうまく適応し子育てしている母親もいれば，その温度差で悩み，子育てや日常生活に支障にきたす場合もあると考えられる．したがって，母親がどのような近隣等地域のつながりで育っているかを念頭に置きつつ，現在のおかれた環境に満足しているか，他者と良好な関係性であるか，を同時に捉えることが必要と考える．近所付き合いの程度や人数，近隣住民との行き来の程度等の実態と併せて，その近隣等地域環境の満足度や関係性を把握することにより，現代の多様なニーズをもつ母親の個別性の理解につながり，子育て支援に必要な策の検討材料になると考える．

５．本研究の限界と課題

本研究の参加者は，隣接する２市町の農村地域で暮らし，自ら子育て支援の広場等に出向き，交流を求めることのできる母親８名であり，一般化には限界がある．また，農村地域とは異なる地域特性で育った母親や，今回分析対象としていない転勤族の母親についても検討する必要がある．さらに，本研究では，母親ら個人の地域のつながりに関するインタビュー内容のデータを基にSCの概念で検討している．SC論には，SCを個人の特徴に関するものとみなすものと，近隣や街，学校や職場といったコミュニティの特性としてとらえる２つのアプローチがあるが[23]，本研究では十分な区別とその上での検討ができておらず，限界がある．

謝辞

本研究にご協力いただきました参加者の皆様，インタビューを実施させていただいた施設の代表者様はじめ職員の皆様，調査２市町の子育て支援担当者様，B町保健師様に深く感謝申し上げます．

利益相反

なし

引用文献

1）内閣府：平成19年国民生活白書. http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/01_honpen/index.html，2014/03/03アクセス
2）内閣府：平成26年度社会意識に関する世論調査. http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-shakai/zh/z14.html，2015/09/23アクセス
3）ケヴィンブラウン，ジョーダグラス，キャサリンハミルトンギアクリトシス，他１名著，上野昌枝，山田和子監訳：保健師・助産師による子ども虐待予防「CAREプログラム」．56-83，明石出版，2012.

4）数井みゆき，遠藤利彦，田中亜希子，他２名：日本人母子における愛着の世代間伝達．教育心理学研究，48,323-332,2000.
5）田邊恭子，米澤好史：母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達－母親像に着目した子育て支援への提案．和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，19,19-28,2009.
6）川崎裕美，海原康孝，小坂忍，他２名：母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討．小児保健研究，63（６），667-673,2004.
7）中谷奈津子：母親の定位家族体験と育児不安 －母親の育児ネットワークを視野に入れて－．厚生の指標，56（５），１-9,2009.
8）坂間伊津美，山崎喜比古，川田智恵子：育児ストレインの規程要因に関する研究．日本公衆衛生雑誌，46（４），250-262,1999.
9）斉藤早香枝：母親の育児ストレスの変化と被養育体験との関連．北海道大学医療技術短期大学部紀要，12,31-41,1999.
10）内閣府：都市と地方における子育て環境に関する調査報告書【全体版】平成 24 年３月．http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/cyousa23/kankyo/index_pdf.html，2015/11/23 アクセス
11）厚生労働省：「健やか親子 21（第２次）」について検討会報告書 平成 26 年４月．http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000041585.html，2015/09/22 アクセス
12）厚生労働省：地域保健対策の推進に関する基本的な指針 平成 24 年７月．http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000079549.pdf，2015/09/22 アクセス
13）ロバート・D・パットナム：哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造．NTT 出版，206-220,2011.
14）近藤克則：ソーシャル・キャピタルと高齢者の健康．イチロー・カワチ，等々力英美編：ソーシャル・キャピタルと地域の力：沖縄から考える健康と長寿．日本評論社，29-47,2013.
15）安梅勅江：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開．医歯薬出版株式会社，１-9,2009.
16）吉村隆，北山秋雄：里山の暮らしにおけるソーシャル・キャピタルの特徴－里山に暮らす高齢者のインタビューを通して－．日本ルーラルナーシング学会誌，8, 1-15,2013.
17）井上智代，渡辺修一郎：農村における健康に資するソーシャル・キャピタルの質的分析－高齢者へのグループ・インタビューを通じて－．日本農村医学会雑誌，63（５），723-733,2015.
18）T. ハーファム：社会調査による地域レベルのソーシャル・キャピタル測定．イチロー・カワチ，S.V. スブラマニアン，ダニエル・キム編：ソーシャル・キャピタルと健康．日本評論社，82-83,2012.
19）農林水産省農村振興局：「農村のソーシャルキャピタル」～豊かな人間関係の維持・再生に向けて～．http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/socialcapital/pdf/data03.pdf，2015/09/25 アクセス
20）内閣府：平成 14 年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて．https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report_h14_sc_2.pdf，2013/03/15 アクセス
21）稲葉陽二：ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ．中公新書，49-53,2011.
22）石垣和子：成人が身をおく文化を尊重する．林直子，鈴木久美，酒井郁子，他１名編：成人看護学概論．南江堂，181-190,2014.
23）埴淵知哉，中谷友樹：地域コミュニティのソーシャル・キャピタルを規定する文脈的要因．イチロー・カワチ，高尾総司，S.V. スブラマニアン編：ソーシャルキャピタルと健康政策 地域で活用するために．日本評論社，151-172,2013.

Ties to Local Community Felt by Mothers Comparing Present and Former Times in an Agricultural District: Investigation of Social Capital

Noriko KANEKO, Kazuko ISHIGAKI, Keiko AGAWA

Abstract

The purpose of our study was to clarify mothers' feelings regarding the child-rearing environment in a rural region, comparing the environment when the mother was a child with the present-time environment. Group interviews were conducted with 8 infant-rearing mothers living in an agricultural district, and the results were qualitatively analyzed. In mothers' childhood, they felt ties to the local community due to experiences including "being involved with local adults when accompanying their mothers or grandmothers", "children were able to sometimes play freely by themselves without adults", "local adults kindly watched over children", and "had the sense of security as most local people were acquainted with each other". In contrast, the present-day situation in local communities included "a great variation in the relationship with neighbors (including some superficial and some close relation compared with the former time)", "no close communication within a shared school district", "close relationships are more likely outside a neighborhood (within other groups such as sports clubs)", "be a local community member in principle (occasionally joining regional events or festivals)", and "the need to protect children from suspicious individuals". Generally, mothers' childhood memories were positive, but feelings for those of the present-day range from positive to negative in terms of social capital; namely, mothers have a warm relationship with specific individuals while having only superficial connection to the local community as a whole.

Keywords child-rearing, agricultural district, childhood of mothers, relationships in the community, social capital